

カラカラ鳴る海

小川未明

青空文庫

この港は山の陰になつていましたから、穏やかな、まことにいい港でありました。平常はもとより、たとえ天氣のよくないような日であつても、この港の中だけはあまり波も高く立たず、ここにさえ逃れれば安心というので、たくさん船がみんなこの港の内に集まつてきたのであります。

ある日のこと、沖の方がたいへんに荒れたことがありました。沖を航海していたいろいろな船は、みんなこの港を目がけていつしようにけんめいにはいつてきました。港の内は諸国の船々でいっぱいになりました。

赤い船や、白い船や、黒い船や檣の三本あるもの、また二本あるもの、長い船やあまり長くないのや、いろいろありました。また旗を立てている船にも、三角の旗や四角の旗や、いくつも旗を立てているのや、ただ一つぎりのやさまぎまでありました。また煙突から黒い煙を上げているのもあれば帆船もありまして、それは見るだけでも海の上はにぎやかでありました。

港の人々はみんな海岸に出てながめていました。その中には老人もあれば子供もありました。若者もあれば娘もありました。また子供を負っている母親もあれば、ま

たお嫁さんになつたばかりの、髪を美しく結つた若い女もありました。

老人はみんなを振り返りながら、

「私は、もう幾十年の昔から、この港の内で朝晩送つてきたものだ。この港にはいつてくるような船で知らない船は一つもない。たいていの船はみな見覚えがあるばかりでなしに、私よりみんなずっと船の年も若いものばかりだ。古くて今から二十年と上に出る船はあるまい。私の若かつたころの船は、もはやたいてい年を取つてしまつて、長い航海の役にはたたなくなつたとみえる。そしていつとなしにこの港へもその姿を見せなくなつてしまつた。ごく若いのはやつと半年から一年、二年というようなのが、この中にまじつてゐる。この港へはいつてくるほどの船で私の顔を知らないものはない。みんなきつと一度は私にあいさつをして水をいれるなり石炭を積むなりするにきまつてゐる。私はまたその船をよく覚えてゐる。この船はどこの国の船だかということをよく知つてゐる。沖が荒れてゐるので、このとおりみんなこの港にはいつてきたのだ。おまえたちもなにかと、頼まれたりしんせつに世話をしてやるがいい。お天気になるまでは、みんなこの港の内に滞在していることだろうから……。」と、老人はいいました。

若者たちのうちでは、朝のうちから舢乗に乗つて港の内をこぎまわつていました。なに

か変わったことがないか？　こう知らない他国の船がたくさん集まっているのだから、まちがいが起こってはならないというのでありました。

若者たちは、たくさんな船の間をこぎまわっていますと、この港へ上げるために小舟へ荷をおろしている船もありました。またこの港から貨物を積んでゆくために、小舟で荷を運んでいる船もありました。また船の甲板を洗っているのや、港の町へ遊びにゆこうとして解をこぎはじめているのや、それは一様でなかったのです。

しかしどの船もなんとなく活気づいていました。天気になるのを待つて、また長い波路を切つて出かけようとするので、その前にこれを機会に骨休みをしているように見られました。ある船からは、勇ましい歌の声などがきこえたのでした。

このとき、これらのたくさんな船の中にまじつて、一その見なれない船が停泊していました。その船には、一つの旗も立っていないければ、乗り込んでいる人たちの姿すら、甲板にはあらわれていなかったのです。そして見るからに、なんとなく陰気な船であつて、その船の名さえ書いてなければ、もとよりどの国の船ともわからなかったものでありました。

「俺たちはいままでこんな船を一度も見ることがない、どこの国の船だろうな。」と、若

者たちは目をみはりました。

彼らはこの陰気な、国籍もわからない船の近くに停泊している他の船がありましたから、ようすをきこうとその船へ近づいて、乗組人に、「あの船はどこの船か知らないか。」と、港の若者たちはたずねました。すると、その船の乗組員らは、

「じつは私たちもあの船を見ておかしな船だと思つていたのです。なんでも昨夜、真夜中ごろ、どこからか石炭を運んできて、積み込んだようないでした。そして乗っている人たちは、みな顔を包んで目ばかり出しているのです、こちらの国の船とも外国の船とも見当がつかないのです。」と答えました。

「ますます、不思議だ！」と、若者たちはいつて、さつそく艇を陸へこぎつけると、老人のもとへやつてきました。老人ならたいいの船のことも知っているからです。

ちやうど老人は、そこに立つているみんなを振り向きながら自慢話をしていたときでありました。

若者たちは老人のそばにやつてきて、不思議な身柄のわからない船が、港の内にはいつていることを告げたのであります。

「どこにその船はいる？」

と老人はいつて、沖の方を見やりました。

「あの赤い船のうしろにいる、あまり大きくない黒い船です。」と、若者は指さしました。

老人は黙つてうなずきました。

「船の名も書いてなければ、またこの国の船か旗も立てておりません……。」「と、若者の一人がいうと、他の一人は、

「なんでも乗組人は、顔を隠して目ばかり出しているといひます。」といひました。

また、そのそばに立つていた他の一人の男は、

「なんでも夜中に石炭をどこからか運んできて船の中に積み込んだともいうことです：

。」「といひました。

この話をきいた人々は、いづれも首をのぼして、その船のいる方を見ました。そして、「見える、見える、なるほど怪しげな船があすこに泊まっている！」と、口々にいつていました。

老人は独りおちつきながら、

「天氣がよくなつたら、明日にもどこかへいつてしまふだろう。」と答えました。

すると、血気にはやる若者たちは、そんなのんきなことをいつてはいられんというふうで、

「海賊船かもわからないものを、このままに黙つてはいられない。すぐに届け出なければ……。」と、一人がいました。

また、他の一人は、

「この港のものが知つていて、黙つていたということがわかれば、こちらの手落ちになるのだから、どうしてもこのままにしておくことができない。」といいました。

見ている人々の中からも、「このことを港じゅうのものに知らして、あの船を押さえ、てしまったほうがいい。」といったものもありました。

けれど老人一人だけは、やはり黙っていました。

「おまえさんは目が悪くなつてあの船が見えないからだろう。」と、中には皮肉をいつて、いままで自慢をしていた老人の鼻を折つてやろうと思つたものもありました。

「なに、私にあの船が見えないことがあるもんか。あの船は昨日の晩方、あらしの最中にどこからかこの港の内に逃げてきたのだ。私はそのときちゃんと知つて、身柄のわからない……今までに、見たことのない船だとは思つていた。」と、老人は答えまし

た。

「そんならなぜ、いままで黙だまつておいたのですか？」と、舢はしけから上あがってきた、若者わかものの一人ひとりがたずねました。

老人ろうじんはうなずいて、

「あらしのために困こまつて逃にげてきたのだ。天気てんきになればどこへかいつてしまふと思おもつて、黙だまつていたんだ。」といいました。

若者わかものたちは老人ろうじんにかまわず、その船ふねを処分しよぶんすることにしました。中なかにはこの船ふねを取り押おさえてしまおうというもの、届け出ととたほうがいいというもの、またはすぐにこの港みなとから追おいたててしまつたほうがいいというもので議論ぎろんはもめたのでした。

しかし、けつきよく、すぐに追おいたてるということにきまつて、彼らかれはふたたび舢はしけに乗のつて出でかけました。手てに手てに万まん一いちの場合ばあいを慮おもかつて、短銃たんじゆうや獵銃りやうじゆうなどを携け帶いたしながら、この怪あやしげな船ふねを目めざしてこいでゆきました。

若者わかものたちは怪あやしげな船ふねのそばにゆくと、大きな声こゑでどなりました。しばらくするとはたして、顔かおを隠かくして目めばかり出だした男おとこが、首くびを出だしました。若者わかものたちはすぐにこの港みなとから出でてゆくように、もし聞きかなければ、その船ふねを取り押おさえるなりその筋すじへ訴うたへ出るなり、

するからといったのであります。

すると、その怪しげな船の中から幾つも頭を出しました。どの首も目ばかり出して黒い布で包んでいます。そしてその黒い頭をぺこぺこ下げて、どうか今夜だけでも一晩ここに泊めておいてくれと頼みました。しかし若者たちは承知をしなかったのです。

「この港には規則があるのだから、すぐ出てゆかなければ処分をする……。」「いいました。

黒い頭が、みんな船の中に引込んでしまいました。それからまもなく、その陰気な船は動き出して、影のようにこの港の内から、外海へ出ていってしまったのであります。

この怪しげな船の姿が見えなくなってしまったとき、若者たちは舳をこいで陸へ上がつてきました。そして老人に向かつて、

「みんなが頭をぺこぺこ下げて、今晚だけでも一晩泊めておいてくれいと頼みました。」と、その有り様を話しました。

この人のよさそうな老人は、やはりうなずきながら、そうだろうといわぬばかりに、「今夜は、昨夜よりも大きいあらしになりそうだ……。いま、あの船をこの港から立たせるのは、みんなを殺してしまうようなものだからな。」と、深いため息をもらして答えま

した。

人々が、海岸から散じてしまつて夜になりかけたころでした。ほんとうに海の上はひじょうなあらしになつたのであります。それは老人のいったとおりでした。若者たちは老人の言葉を思い出し、またあの船を無理に追いたてたことなどを思い出して、さすがにいい気持ちはしませんでした。

若者たちはめいめい心がとがめて、一夜じゅうよく眠ることができなかつたのです。あくる日の朝になつて、あらしが幾分かおさまつたころ、昨夜この港へ入つてきた船があるということをききましたので、若者たちはさつそく小舟に乗つて、その船のところへ出かけてゆきました。その船はよくこの港へやつてくる船でありました。

「あなたがたは外海の方で、どこかほかの船におあいになりませんでしたか？」と、若者たちはたずねました。すると、昨夜はいつてきたという船の中から、

「そんなに大きくもなかつたが、黒い船で一そう浪にもまれて、いまにも沈みかかつていたのを見ました。けれど暗夜のことで、それにあの大暴風雨ではどうすることもできなかった。ただ、不思議なのは、その船はこの港に入ろうとはせずに、あのあらしの中を沖へ沖へといったのはどうしたことかと、みんなが不思議がつていたのだ。いまごろはきつ

とどこかで沈しずんでしまったであらう……。」「といったものがありました。

若わか者かもたちは、まさしくあの船ふねのことであると思おもいました。かわいそうなことをしたと感かんじられたのでした。しかし、いまとなつてはどうすることもできませんでした。

二日ふつかめです。暴風ぼうふうが静しずまってしまつたと、港みなとじゆうに群むらがつていた船ふねたちは、いつのまにか、思おもい思おもいにいづこへとなく出でていつてしまひました。人々ひとびともあらしのことを忘わすれてしまひ、海うみの上うへは平穩へいおんにさながら鏡かがみのように輝かがやいていました。

ある日ひのこと、白しろい船ふねが一そうこの港みなとの中なかにはいつてきました。そして港みなとの内に停泊ていはくすると、小舟こぶねに幾いくつも箱はこを積つんで陸りくをさしてこいできました。

「私わたしたちは南みなみの国くにから、はじめてみかんを積つんでこの港みなとにはいつてきたものです。いくらでもいいから今後こんごの取引とりひきのために、安やすくまけますからこのみかんを買かつてください。」
といたしました。

港みなとの人ひとたちはそこに集あつまつてきました。そして、「どんなみかんだか箱はこのふたを取とつて見みせよ。」といたしました。船ふねのものは一つの箱はこを碎くだいて内うちを見みせました。するとみごとなみかんがいつぱい詰つまっていました。

そこで取引とりひきは、どうさなくまつてしまひました。

陸^{りく}の方^{ほう}からも舁^{はし}けだ^だ出して、白^{しろ}い船^{ふね}の積^つんできたみかんの箱^{はこ}を町^{まち}へと運^{はこ}びました。やつとその荷^にを運^{はこ}び終^おわると、

「さようなら。」といつて、白^{しろ}い船^{ふね}はこの港^{みなと}から出^でていってしまいました。

「いいみかんをたんとまあ、安^{やす}く買^かったものだ。これで今年^{ことし}はこの町^{まち}は太^{おお}もうけをするだろう。」と、みなは口^{くち}々^{ぐち}にいつてうれしがりました。

「なんという名^なまえの船^{ふね}だったかな、だれか憶^{おぼ}えていたであらう。」と、一^{ひとり}人がいいました。

「さあ、なんといつたかな？」と、そこに集^{あつ}まった問^{とん}屋^やのものは、たがいに顔^{かお}を見^み合^あわしました。

すると、一^{ひとり}人^{ひと}の若^{わか}者^{もの}が、

「そのことだ！ 俺^{おれ}は、いおうと思^{おも}つて忘^{わす}れていた。あの白^{しろ}い船^{ふね}にはなんにも名^なまえが書^かいてなかったようだ。」といいました。

「まるできつねにつままれたような話^{はなし}だ。」と、みんなは口^{くち}々^{ぐち}にいつて、その日^ひは暮^くれてしまいました。

翌^{よく}日^{じつ}、箱^{はこ}の中^{なか}のみかんを取^とり出^だそうとしますと、どの箱^{はこ}の中^{なか}からも、出^でてくるのはみ

かんでなくて、円い石塊ばかりでありました。みんなはどんなにびっくりしましたでしょう。

「みかんにしては重い箱だと思つていた。」といったものもありました。

そしてそのとき、全部の箱をあらためて見なかつたのを悔いたのでありました。みんなは悪い船にだまされたといつて、その黒い石をすっかり海の中に投げ捨ててしまいました。それから後のことであります。あらしがきたときに、この港のものは、みんなが震え上がらなければなりませんでした。なぜというに、いつか海の中へ捨てた黒い石が、すっかり生きてでもいるようにカラカラカラツと鳴つて、波の押し寄せるたびに岸へ打ち上げられて、また波の退くたびに海の底へもぐり込むように隠れたからでした。そしてあらしのやむまでは、カラ、カラ、カラツといつて、昼となく夜となく、黒い石が鳴つてやまなかつたのであります。

平常は静かな山蔭の港も、あらしの日にはじつに気味悪い港でありました。船乗りらはこの石の音をきくと、ひやりと体じゆうが寒くなるといいます。そしてこの港はいつしか石ばかりになって、船のはいれないまになつてしまいました。いまだにあらしの日には、その海が冷笑うように鳴るのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「カラカラ鳴《な》る海《うみ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カラカラ鳴る海

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>